

信じた人々の群れは心も思いも一つにし、一人として持ち物を自分のものだと言う者はなく、すべてを共有していた。使徒たちは、大いなる力をもって主イエスの復活を証した。そして、神の恵みが一同に豊かに注がれた。信者の中には、一人も貧しい人がいなかった。土地や家を持っている人が皆、それを売っては代金を持ち寄り、使徒たちの足もとに置き、必要に応じて、おのおのに分配されたからである。

レビ族の人で、使徒たちからバルナバ「慰めの子」という意味一と呼ばれていた、キプロス島生まれのヨセフも、持っていた畑を売り、その代金を持って来て、使徒たちの足元に置いた。（使徒4：32～37）

聖霊降臨日、120人ほど、12使徒や兄弟姉妹たちが集まっている所に聖霊が降った。聖霊に押し出されて、ペトロが「あなたがたが十字架につけたイエスを、神は主とし、またメシアとなさったのです」と語った説教を聞いて、悔い改めて洗礼を受けた人が3000人ほどいた。また、足の不自由な人を立ち上がらせた後、死者の中から復活した主イエスの名による信仰が、彼を癒やしたというペトロの説教を聞いて、5000人ほどが信じたと記している。数字通り受け取ると、原始エルサレム教会は8120人もの人々が集まったことになる。この数字は過大評価しているのではないかと思われるが、多くの人々が教会に感激をもって集まったことは確かである。

著者ルカは、その教会はどのような群れであったかを記している。ナザレのイエスをキリストと信じた人々は心も思いも一つであった。使徒たちは、主イエスは復活し、生きて招いておられると力強く証した。神の恵みは一同の上に豊かに注がれていた。人々は同じ信仰に立ち、持ち物を自分のものだと言う者はなく、全てを共有し、貧しく、欠乏する者は一人もいなかった。土地や家を持っている人は皆、それを売り払って、代金を持ち寄り、信者たちに尊敬と敬意を持たれていた使徒たちの足元に置いた。群れの人々には必要に応じて、各々に分配された。完全な共有財産制であった。生産性のない群れであったので、共産制ではなかった。なぜ、このような体制ができたのか。まず、同じ信仰にあったので、互いの間に篤い愛があり、全てを分かち合う共有制を可能にしたと考えられる。それと同時に、主イエスの再臨による終末信仰があったと思われる。主イエスが天に上げられた時、白い衣を着た天使が「ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げ立っているのか。あなたがたを離れたイエスは、天に昇って行くのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またお出でになる」と告げている。主イエスの再臨による終末はすぐに来るという信仰が財産を持つことに意味がなく、共有制の群れを作り、それを喜び合ったのである。その後、幾たびも、何年何月何日に、世の終わりが来ると緊迫した終末信仰を説いて、財産を没収した宗教団体が現れている。もちろん、終末信仰を悪用した宗教である。初代教会において、終末の遅延が大きな問題となり、教会のあり方を揺るがしていく混乱も起こしていった。

レビ族の人で、使徒たちから、「慰めの子」という意味のバルナバと呼ばれていた、地中海のキプロス島生まれのヨセフも、持っていた畑を売り、その代金を持って来て、使徒たちの足元に置いた。このバルナバは後のパウロと深い関係を持つことになる重要な人物である。エルサレム教会は財産を分かち合った。主イエスに愛され、この方を主と信じる者同志、平等な愛を生きようとする熱く燃える群れであったからである。